

氏 名 とりい おきひこ
鳥居 興彦

学 位 博士（芸術学）

学位記番号 博（芸）乙第3号

学位授与年月日 平成29年9月30日

学位授与の要件 学位規程第3条第4項該当

論文題目名 茶道と禅とキリスト教
—その底流を流れる思想、靈性について—

審査委員 主査 山口 義久

副査 倉澤 行洋

同 森口 まどか

一、論文内容の要旨

本論文は、茶道と禅の結びつきについては一般に認められているのに対して、茶道とキリスト教が異質で無縁のものであると見なされる現状に疑問を投げかけ、禅仏教とキリスト教の教義・教説面ではなく、靈性の面に着目することによって、茶道と禅とキリスト教が共通性を持つていることを示すものである。

茶道の点前とキリスト教のミサの儀式が、形式の点だけでなく、精神性の面からも互いを連想させるものであることは、多くの人に疑問をいだかせた。また、利休七哲のうち過半数がキリシタン大名であって、禅宗徒である利休が彼らと親しく交流していたことも、不思議に思われ議論を呼ぶものであった。

このような疑問は、禅とキリスト教の間に根本的な共通性が見出されれば解消するであろう。しかし、禅宗を含む仏教とキリスト教の間には、教義・教説面で根本的な違いがある。唯一の神を抛り所とするキリスト教においては、人間の救いも神によらざるをえないのに対して、すべては因縁・縁起によると考える仏教においては、縁起の法を抛り所とし、悟りによる救いが説かれるなど、両者の間には様々な相違点がある。

本論文が着目する靈性は、宗教における教義・教説とは別のもので、宗教そのものではないが、その背後にあつてそれを動かすものである。鈴木大拙によると、この世の中には、合理性にもとづく知性・分別的世界と靈性的世界とがある。前者は日常の我々が生活する世界であり、自然科学をはじめとする学問はこの世界に属する。後者は理屈や分別では割り切れない、無分別と無差別の世界であるが、前者の背後にあつてこの世に大きな影響を与えるものである。

宗教の世界には、知性・分別だけでは理解できないことが少なくない。仏教の経典に現れる矛盾的・逆説的表現や即非の論理、入不二法門の世界など、日常的な合理性からは理解しがたい表現は、靈性的世界に属す捉え方を知性・分別的世界の言葉で表そうとすることによって生まれたり、言葉や行動で表せる以前の靈性的世界のあり方を伝えようとするところに生まれたりすると考えられる。

このような靈性の観点から比較すると、大乘仏教とキリスト教の間にも共通した点が見られる。大乘仏教哲学の中心概念である「大智」と「大悲」は一体として同一化される一方、キリスト教の神における知は神の本質であり、同時に神の愛も

神の本質である。両者において、神・仏の知と愛が最重要視され、さらにそれらが同一化される考え方も同じであるのは、大きな共通性である。

また、両宗教において、神・仏は人の心に現存し、救いを求めるためには自分の外からではなく、己の心の中に現存する神・仏をこそ求めるべきだと説かれる。さらに、神・仏は、そのあり方自体が超実体的であり、人間の理性や想像をはるかに超え、人間の感覚では把握できないというのが、禅にもキリスト教にも共通した考え方である。

禅の始祖菩提達磨をはじめとする各禅師の思想は一貫して、悟りを開くためには分別知を捨て、無為・無分別の知によらねばならないと説く、キリスト教においても、人間の知性によつては神の本質を知ることが出来ないと言張される。この主張は、偽ディオニシウスをはじめとして、トマス・アクィナスも、十字架のヨハネも一致して説いている。

キリスト教における観想の歴史は古くから存在し、カトリック教会において観想は信仰の大きな柱の一つとされた。一方、座禅によつて培われるのは定力、すなわち意識の表層を鎮め、正しい決断の源となる力である。その力によつて、己の本性を悟る見性が得られる。このことによつて、論証的思考によらずに、直接仏性を把握することを目指すのである。キリスト教の観想も、禅の見性も、論証的思考によらずに直接神・仏を把握しようとする共通性をもっている。

また、神・仏の体験のためには、この世のものに縛られない心のあり方を必要とする点でも、キリスト教と禅との間に共通性が見られる。これは、心を空しくすること、あるいは心の浄化ともされる。この考え方は、別の面では清浄や清貧を重んじる思想として、両宗教に共通している。

さて、キリスト教と禅の様々な共通性は、茶道との関係ではどのようなかたちで現れているのか。茶道は禅修行の一環として展開して来たものであり、そこには禅道としての思想・靈性が強く宿っている。それがキリスト教の靈性的世界とどのように結びつくかが、本論文の課題である。

茶道において重視される「和敬清寂」の「和」は、人間性への敬意に基づいた調和であり、仏教の「大悲」の心とキリスト教の愛の精神に共通する。「敬」は、主客が仏性を具有する人格として尊敬を認め合うことであるが、この背景はすべての人間の心の中に神・仏が現存するという思想であり、「敬」が茶会に全精神を集中するという面では、キリスト教の観想

や禅の見性と共通するところがある。

茶道における「清」は、感覚的に清潔である以上に、心を清めることを意味しており、両宗教における清浄を重視する思想と共通し、この世のものへの執着から離れるという教えにもつながっている。「寂」は、寂然不動の境地であり、寂滅にも通じるが、これは禅・仏教の教えと共通するだけでなく、キリスト教の、自我を抑えてすべてを神に委ねることによって心の動揺から解放されるという思想とも共通している。

また、茶道における「一座建立」とは、主客一体となった結びつきのことであるが、これはキリスト教の聖餐式における一体感とも相通じ、禅修行における僧伽（老師と弟子たちが修行を共にする集まり）における一体感とも共通している。さらに、茶道の「清貧」の精神も、禅にもキリスト教にも共通して尊重されるものである。

そのほか、利休七則の「花は野にあるように」と、聖書の「野の花を見よ」との共通性も、人間の分別を離れた霊性的世界に見いだされ、茶室における躡口の背景にある「人間は平等であり、互いに尊重すべき」だという思想などにも、茶道と禅とキリスト教が共通していることが見られる。

一六世紀に来日した宣教師たちは、禅と茶道に特別の好意と関心を示した。茶道を「孤独の宗教」と呼んで、教会における諸儀式と並んで一種神聖なものに見なし、茶の湯によってキリスト教の土着化を図ろうともした。彼らは茶道を「一体化」と合一の祝典であり、キリスト教の聖餐と共通する精神的特徴を持つ儀式」と捉えたのである。このことも、茶道の霊性が、禅のみならず、キリスト教の霊性と共通するものであることを示している。

したがって、茶道と禅とキリスト教とは、その主要面において、思想、霊性を共有するというのが、本論文の結論である。このことが認められれば、利休の周囲に多くのキリシタン大名がいて交流を深めていたことも、宣教師たちが茶室の建設に熱心であったり、ミサの儀式が茶道の点前と相互に連想させるほど似ていたりすることも、ある程度納得がゆくのである。

以下に、本論文の目次を掲げる。

序論

- 一 研究の動機及び背景
- 二 研究の目的
- 三 研究の方法

本論

第一章 はじめに

第二章 一五世紀から一七世紀にかけての思想的、時代的背景

第三章 茶道と禅のつながり

一 茶道と禅のつながり

二 茶道がなぜ禅の修行に通じるのか

第四章 大乘仏教の主要概念と本論文で扱う禅

一 大乘仏教に関する主要概念

二 禅の歴史と本論文で扱う禅

第五章 キリスト教の概念と本論文で扱うキリスト教

一 概要

二 本論文で扱うキリスト教

三 キリスト教神秘主義

四 本論文におけるキリスト教思想を代表する人々

第六章 霊性

一 霊性（スピリチュアリティ）

二 霊性を形成する要素

第七章 異なる宗教を比較する場合の視点

一 宗教に対する観察

二 宗教における教義・教説面（神学面）からの比較と、霊性面からの比較の相違

第八章 禅思想とキリスト教思想の比較

一 禅とキリスト教における知性・分別的世界と霊性的世界

二 大乘仏教における大智と大悲の同一化とキリスト教における神の知性と愛の同一化

三 道理、道徳面からの考察

四 神・仏の人間の心への現存

五 神・仏の、人間世界に対する超越性

六 神・仏の体験（悟りを開く）およびその内容

七 清浄という思想

八 清貧に対する考え方

九 山川草木悉有仏性の思想

十 禅、キリスト教における業苦の緊縛と、そこからの脱却についての考え方

十一 禅とキリスト教の教義・教説面での相違点

第九章 茶道における霊性

一 茶道における霊性

二 茶道における霊性と、禅およびキリスト教の霊性との比較

三 外国人宣教師から見た茶道

第十章 本論文の結論

第十一章 あとがき

一 茶道とキリスト教

二 茶道と靈性

二、論文審査結果の要旨

(一) 研究テーマの独自性

茶道と禅の間に深い関係があることは、疑うことのできない常識に属しているが、茶道とキリスト教の関係を問題にしたことは、本研究の大きな特色であり、独自の意義を持っている。研究分野としては、伝統藝術の視点と比較思想の視点とを両方とも必要とするために、広範にわたっており、スケールの大きな研究テーマに取り組んだ点は評価に値する。

(二) 研究方法とその成果

そのようなテーマを扱うために、様々な文献を渉猟するのが本研究の方法である。キリスト教の神秘思想にとどまらず、聖書そのものの中にも、茶道や禅と通じる思想の背景を探っているのは独自の点である。その結果、大きなテーマであるにもかかわらず、伝統藝術としての茶道と、禅とキリスト教の比較思想の両側面から、独自の見通しを得た点は評価に値する。

(三) 残された課題

比較思想の観点からは、キリスト教思想の中から都合よく茶道につながる思想を抽出したような印象は払拭できない。また、伝統藝術の観点からは、もう一度茶道に戻って、この比較研究が茶道にとってどのような意味を持つか、茶道と靈性の関係についての考察を深めることが期待される。

三、最終審査結果

以上、本研究の独自性、文献を活用する研究方法、一定の結論を導く論理構成という三つの観点から検討した結果、審査委員一同、一致して本研究が博士の学位論文の水準に到達していると結論づけた。